



いわて医療通信 【加齢に関連する眼の異常】

5. 加齢黄斑変性の新しい治療

加齢黄斑変性の新しい治療法をいくつか記載します。

新しい治療法としてタケノコである新生血管の発生を抑える抗VEGF薬(血管内皮細胞増殖因子の阻害剤)を眼に注射する方法が登場しました。除草剤(抗VEGF薬)でタケノコを枯らす方法です。この注射は従来の治療法に比べてさほど大きな合併症も見られず、効果も高く、加齢黄斑変性の治療の主流になりました。その一方で、注射による治療は再発率が高く、1〜数月に一度の頻度で繰り返し注射を受ける必要が

あります。また、薬が高価で、注射してくれる施設も少ないことから、特定の施設に患者さんが殺到し、毎月、病院で数時間待たされては高価な注射を受けるという、なかなか大変な治療でもあります。

人の受精卵を用いるためその倫理性が問題となるため、その後山中伸弥教授が作成したiPS細胞を用いた研究を行っています。高橋博士の研究は、タケノコを引き抜いた上で、患者さん本人から培養した網膜色素上皮細胞(iPS細胞由来)を用いて、穴が開いた床板を補修するというものです。

理化学研究所の高橋政代博士が、加齢黄斑変性に再生医療を用いた治療を開始されています。今回はその概要を解説してみました。高橋先生は2008年に世界で初めてヒトES細胞から神経網膜を分化誘導することに成功した方です。ES細胞は

まだ達せず、現状維持がべ

スト)。なお、この治療は「試験」として行われたもので、今後は患者さんに望ましくない合併症が出ないかどうかを見守る必要があります。現状ではiPS細胞を用いた治療には莫大なお金がかかることもあり、一般実用が始まるのはもう少し先の話になります。

岩手医科大学 眼科学講座講師 田中三知子

まだ達せず、現状維持がべ